

客者評判記 堀切梨奈子

「客者評判記」は読書会。江戸時代の歌舞伎の観客評論本『客者評判記』を読みながら、現代の観客のありかたについて考える。研究員の堀切を中心に、中村、新庄、池上、ホシ、ササキ、大川原の七名で構成。小冊子『読みかけ客者評判記』作成やコラム執筆も。

劇場で遊んでいたある日。客席に目を向けてみると、男役、女役、敵役や娘役など、よりどりみどりの役柄をお客さんが演じているように見えました。逆に役者は、客席を観劇しているようでした。そんなお客さんたちを、すらりと並べてみたのがこの本です。

〔三芝居客者評判記〕文化八（一八二）年あとがき意識

『客者評判記』^{かくしゃひやうばんき}は、江戸時代に出版された、歌舞伎のお客さんを題材にした本です。江戸時代の戯作者（＝作家）、式亭三馬によって執筆された滑稽本で、江戸時代において二〇〇年にわたるロングセラーであった『役者評判記』のパロディ本です。『役者評判記』は、舞台上の歌舞伎役者の容姿や技芸を評した本ですが、『客者評判記』では、客席にいるお客さん（＝客者）のふるまいや楽しみかたが評する対象となっています。

この本に登場するさまざまなお客さんの姿をきっかけに、現代の芸術活動の場における

お客さんを語ることができないだろうか、という思いから、「客者評判記読書会」をはじめました。二〇一四年に、つくりかた研究所のなかで客者評判記読書会がはじまってから一年と少し。活動を通して考えてきたことを、客者評判記の内容と、読書会自体の運営という二つの側面から考えてみようと思います。

「観客」と「お客さん」と「客者」

「観客」という言葉から多くの方がイメージするのは、暗くした客席に座り舞台上の役者を観る姿ではないでしょうか。手元の分厚い辞書をひいてみると、「観客——観る人、見物人」と書かれています。

しかし、最近では、客席に座り舞台上につくられる世界を観ている「観客」は、お客さんの姿のひとつのバリエーションでしかなく、考えたり、歩いたり、参加したり、演じたり、終演後には語ったり、といったさまざまなアクションをしているお客さんの姿をよく見かけるようになりました。「観る」だけではないお客さんの姿は、作品によってきっかけがつけられているものではありますが、そのなかでなにを考え、どのような行動をとるのかは、つくり手側の演出の及ばない、一人ひとりのお客さんにゆだねられている部分であり、そこも含めて作品と呼ばれることが増えていると感じています。そのようなお客さ

んの姿を考え、語るにあたり、観る人という意味をもつ「観客」という言葉だけを使うことに、少し違和感がありました。また、このようなお客さんのありかたの変化は舞台芸術に留まりません。例えばアートプロジェクトでは、アーティストとともに地域の人がつくりあげる状況が作品であることが多くあります。

『客者評判記』では、全部で五四種類の歌舞伎のお客さんが「客者」として紹介されています。たとえば、特定の役者目当てに足しげく劇場に通うのは「巖貞常連」、昔からの芝居好きで今と比べて昔はよかったと言っただけでいるのは「昔巖貞」です。ほかにも、一番端っこの席でも楽しめる「巖藤敷の見物」や、奥さんのお付きで来たもののぼつちりメイクの「岩藤どの」なんて客者も紹介されています。一人ひとりが、「観る」だけに留まらない自分なりの楽しみかたをもつ江戸の客者たちは、現代の「お客さん」を考える、よいきっかけになると思います。

現代の客者

読書会のなかで、「あのときの僕は「見巧者」だった。文脈おさえてるよね、なんて言っちゃう」「家族で宝塚を観にいったとき、静かにひとりで楽しみたい気分だった私は「むすめ」と同じ気持ちかもしれない」「前日から劇場近くに泊まり、そわそわしている「お

宿下がり」という客者は、好きなバンドのライブのために遠方に足を運ぶ、遠征のバンギャのようだ」といった具合に、過去の自分やこれまでに見かけたことのあるお客さんと、江戸の客者とを重ね合わせて話すことがよくありました。客者評判記に登場する客者は、江戸時代だけのものではなく、現代にもいると思えるようになりました。

また、『だれかのみたゆめ 展示と実演』では、来場してくださった方々からも、見かけたことのある客者を募集しました。「初めてストリップにきた若者に、こと細かにいろんなことを教えてくれるおじさん」は、暗黙のルールを知っている「芝居通」。「知らないお客さん同士で楽しくおしゃべりしている」のは、社交も楽しむ「御新造」。映画や観劇に行く时必须寝るお母さん」は「居眠好」。「あえて後ろの方に座って、観客席も含めて劇場を楽しむ」のは、「聾杖敷の見物」……。ほかにも、「一生懸命拍手する人」や「劇を観に行くのに、その劇作家の作品を全部読んでから行く人」など、江戸の客者にはあてはまらない現代オリジナルの客者も多く教えてもらうことができました。現代版の客者評判記をつくるときには、この人たちもラインナップに入るかもしれません。客者を通してお客さんを考えることで、それぞれの楽しみかたをもつ「現代の客者」の多様な姿が見えるようになってきました。

客者を考えることで考えたこと

「観る」だけのふるまいにとどまらないお客さんに対して「観客」という言葉だけを使うことに違和感を感じたことがこの企画をはじめたきっかけである、と冒頭に書きました。その気持ちはいまでも変わらず、いつかは現代版客者評判記をつくって、「観る」に留まらないさまざまなお客さんがいることを、たくさんの言葉で表現したいと夢見ています。

また、この活動を通して私自身がお客さんでいることをもつと楽しむきっかけとして「客者」という概念を考えたいと思うようになりました。客者評判記を手にとりながら、「今日は「聾杖敷の見物」しよう」とか、「今日は積極的に参加してみよう」といった具合に、作品に対する自分の関わりかたを自分で演出するようなイメージです。それから、客者という概念をもって客席を見てみると、「あの人「居眠好」してる」、「あの人いい感じに参加してるな」と、舞台上とは別に、客席に客者という劇が立ち上がってくるかもしれません。客者評判記は、江戸の芝居小屋という舞台芸術におけるお客さんを評した本ですが、この「客者」の考えかたは、アートプロジェクトのお客さん（地域の人）にも応用できると思っています（アートプロジェクトにおいて地域の人をお客さんと捉えることに違和感がある方もいるかもしれませんが、作家が作品をつくり、鑑賞者が作品を観るという関係を基本とした場合、作家と対峙する作家ではない人として、地域の人をお客さんと呼んでいます）。

アートプロジェクトがつくり出す状況には、さまざまな人が絡まっています。キーパーソンと呼ばれるような声の大きい人に注目が集まりがちですが、客者という考えかたをきっかけに、いろんな人がいろんな人に注目することができているのではないかと考えています。「お客さん」を、舞台上と客席の観る・観られる関係の「観客」としてだけではなく、ホワイトキューブで作品を観る「鑑賞者」としてだけではなく、それぞれの楽しみかたをもつ「客者」として捉えることで、お客さん自身がお客さんであることを誇らしく、楽しく思えるようになったらいいな、と思っています。

役割と脱線

客者評判記読書会は、二〇一四年六月に七人のメンバーでスタートしました。この会を開催することは、一冊の本をきっかけにして複数の人が集まる「場」をつくることだと思います。

みんなで読めば、ひとりでは咀嚼できなかつたものも、イメージが湧いたりします。みんなで読むために、メンバーに毎回重点的に読んでくる担当箇所という「役割」を決めました。読書会では各々が役割を発表したあとに、参加者全員でそれを基にした「おしゃべり」をします。体験談、妄想、イメージ、ときには話がとんでもない方向に脱線するときもありました。ちゃんと話を元に戻すため、読書会で脱線する前には「全然違う話なんですけど」と言うことが口癖になっていました。思い返せば、その「おしゃべり」のなかではたくさんの大切なキーワードが出ており、「役割」は、会に足を運んでもらうための口実だったようにも思えます。

また、より面白い脱線とおしゃべりをするために、毎回なにかしら、客者評判記に関係ありそうな、なさそうな本や、ちょっととした小ネタを持ち込むようにしていました。『江戸名物評判記案内』からは「なにはともあれまず褒めよう」という評判記のスタンスを学びましたし、『おじさん図鑑』からは、詳細に対象（おじさん）を観察・分類しながらも特定の個人を示さない美しさを学びました。

読書会自体の主題は「客者評判記を読むこと」でしたが、そこに留まらずさまざまな脱線をみんなで共有し面白がれたことが、後々なにか形あるものをつくるときや、なにかを決めるときに原動力になっていったと思います。

手書きメモ

読書会の場を記録するために、メンバーの誰かに手書きのメモをとってもらおうようにしていました。主にメモをとっていた中村は、文字だけでなくイラストを描いたりもするの

でイメージが湧きやすく、会を重ねるごとに、その文字やイラストを見ながらみんなで話をするようになりました。新庄は、X軸とY軸があるような図を使って客者の話を盛り上げました。文字や図、イラストで埋められていく紙の上が、みんなで話を共有する場になっていたのだと思います。

労力的低コスト

これは、『展示と実演』の際、主に準備を進めていた中村と私の間での合言葉です。自分たちが展示準備にあてられる時間と作業量をしっかりと捉え、無理のない計画を立てようと心がけました。なので、サボろうとかいった意味ではないです。

普段の読書会では決めないこと、答えを出さないこと、脱線することばかりしていた私たちですが、この言葉を掲げたことと、日々たくさん脱線し多くのイメージを共有していたことで、限られた時間のなかで、ひとつの展示の形をつくり出せたのだと思います。自分たちのやりたいことに対して回転数が足りないと思うことも多くある私たちにとっては、新たな側面を発見したような、新鮮な感覚でした。

進めないと進まない

なにかを進めるにあたって、どこまで自分たちで決めて、どこまで相談するのか。どこを任せるべきなのか。ということについて、よく悩まされました。どこまで誰がやるのかが明確になっていない（＝役割のない）つくりかた研究所、そして客者評判記読書会ならではの悩みです。とくに、二〇一四年度末に作成した小冊子『読みかけ客者評判記』の制作にあたっては、自分たちで進めないと進まない事案であったにも関わらず、誰かが進めてくれることを待ちすぎてギリギリのスケジュールになってしまいました。

「役割があつた上で自由にふるまえる余白があること」と、「役割がないこと」は違うのかもかもしれません。とはいえ、はじめからの役割がないことでメンバーのみんながその時々自分の役割を見つけていった二年間は、とても面白かつたと思っています。

外に発信する

いままたひとつ、新しい問題について考えています。それは、いままで自分たちだけで盛り上がってきたものを外に発信することの難しさです。私たちが考えてきた「客者」というお客さんのありかたを、多くの人と共有し、自分たちのためだけの活動ではなくすために、越えていかなければならない問題です。

おわりに

ここまで、客者について書いたことと、会の運営について書いたことは、根本的には同じ問題意識の元に繋がっていると思っております。

お客さんが客者として自分のふるまいに意識的になることと、読書会でメンバーが役割を見つけていくことは、どちらも人が主体的になることです。その関与方法が能動的であれ受動的であれ、自分で自分のありかたや関わりかたを選択することや、そこに意識的になることに、人の主体性があるのではないかと考えています。また、その選択する幅が存在していることが、「継続していく場（＝活動・状況）」のきっかけになるようにも感じるので。